

- (May, 1970), pp.253–67.
- 8) Blanche Gelfant, *op. cit.*, p.147.
 - 9) Joseph Warren Beach, “*Manhattan Transfer*: Collectivism and Abstract Composition” in Allen Belkind’s *Dos Passos, the Critics, and Writer’s Intention* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1971), p.60.
 - 10) David Vanderwerken, *op. cit.*, p.261.
 - 11) *Ibid.*, p.264.
 - 12) Michael Clark, *op. cit.*, p.103.
 - 13) *Ibid.*, p.122.
 - 14) David Vanderwerken *op. cit.*, p.264.
 - 15) Blanche Gelfant, *op. cit.*, p.165.
 - 16) Jay McInerney, “Introduction” to John Dos Passos’ *Manhattan Transfer* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986), p.9.
 - 17) Blanche Gelfant, *op. cit.*, p.133.
 - 18) Johnn Dos Passos, “Why Write for the Theatre Anyway?” *Three Pays* (New York: Harcourt, Brace and Company, 1934), xxii.
 - 19) Hart Crane, “Virginia” in *The Bridge* (Tokyo: Kenkyusha, 1971), pp.67–68.
 - 20) Michael Clark, *op. cit.*, p.103.
 - 21) Jay McInerney, *op. cit.*, p.10.

十萬ドル火事、百萬ドル火事。摩天樓が炎となって燃え上がる、燃える。燃える」(230)と摩天樓炎上を幻想しマッチを擦り続ける。次ぎに、貧しいユダヤ人の娘 Anna Cohen は、婦人服店で縫い子として働いているが、彼女が「未来の夢を縫っている」(355)時に、火にまかれてしまう。消防車の音はけたたましく響く。また、第3部、第1章のスケッチは、第1次大戦の死の雰囲気を描いたものだが、ここにははっきりと「黙示」(Apocalypse)という言葉が使われている。

In the subway their eyes pop as they spell out APOCALYPSE, typhus, cholera, shrapnel, insurrection, death in fire, death in water, death in hunger, death in mud. (247)

作者 Dos Passos は、このように破滅寸前の都市を描くことで、終末的歴史観を示したのである。

Jay McInerney は、Dos Passos の解体された断片的な事件の羅列のような文体（実際には、密接に繋がりがあがあるのだが）が発表当時認められなかったのは、“well-wrought urn”を高く評価するアメリカの「ニュー・クリティシズム」の影響が批評界に強かったからであり、もっと正当な評価がなされるべきであると主張する²¹⁾。「世界」を絶えず冷静に見つめて創作を続けた Dos Passos は、やはり、「歴史の構築者」としての役割を果たした偉大な作家であったことを認めねばならない。

(注)

- 1) 金関寿男, 「マンハッタン乗り換え駅」解説, 大橋健三郎編「ドス・パッス」(研究社, 1967年), p.78.
- 2) Blanche H. Gelfant, *The American City Novel* (Oklahoma: University of Oklahoma Press, 1954), p.142.
- 3) John Dos Passos, *Manhattan Transfer* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986), p.146. 以後, *Manhattan Transfer*からの引用は全てこの版により, カッコ内にページ数のみ記す。
- 4) Michael Clark, *Dos Passos's Early Fiction 1912-1938* (Selingsgrove: Susquehanna University Press, 1987), p.103.
- 5) Blanche H. Gelfant, *op. cit.*, p.164.
- 6) Linda W. Wagner, *Dos Passos: Artist as American* (Austin: University of Texas Press, 1979), pp.52, 56.
- 7) Michael Clark, *op. cit.*, p.108. David L. Vanderwerken, “*Manhattan Transfer*: Dos Passos' Babel Story,” *American Literature* Vol. XLIX

違っており、Specker や Phil Sandbourne の考えは作者の考えを代弁してはいない。批評家 Michael Clark は、「作者は、理想的秩序はニューヨークの汚れのなかにさえ存在することを読者に思い起こさせるために自然を多角的に使っている」²⁰⁾ と論じているが、これは誤った読み方であろう。

第1部、第2章の“Metropolis”の冒頭の短いスケッチにおいて、既に、ニューヨークは、聖書や歴史に登場した Babylon, Nineveh, Rome, Athens, Constantinople などの繁栄を極め、後には滅びた都市と歴史的に連続性があることが暗示されていた。(23) 古代都市の壊滅は、現代都市の宿命的な死や滅びの前兆となっている。次ぎには Stan Emery の泥酔死の場面(229)でこの暗示がなされる。そして最後に、気の狂った浮浪者のわめきたてる言葉で、明確に現代都市の破滅が語られる。

Earthquake insurance, gosh they need it dont they? Do you know *how long God took to destroy the tower of Babel*, folks? Seven Minutes. Do you know *how long the Lord God took to destroy Babylon and Nineveh?* Seven minutes. *There's more wickedness in one block in New York City than there was in a square mile in Nineveh, and how long do you think the Lord God of Sabboath will take to destroy New York City an Brooklyn an the Bronx?* Seven seconds. Seven seconds . . . (340) [Italics mine]

人間の「傲り」に立腹した神は、「バベルの塔」を倒し、罰として、「言葉の混乱」を現代人に与えた。Jimmy が最後まで信じられないのは、この「言葉」であった。古代都市も7分で破壊された。「ニューヨーク市の1ブロックにはニネヴェの1平方マイルにあるよりも多くの悪が存在する」と浮浪者は叫ぶ。「万軍の主なる神」がニューヨーク市を滅ぼすには、たったの7秒しかかからないのである。狂人が都市の終末的運命を予測し、一般市民は「成功の夢」を必死に追うことに夢中で、未来の予測も出来ないという皮肉がここにはこめられている。Jimmy Herf だけが「破壊の都市」をあとにする決心ができる。

このような終末的雰囲気をもさらに強めているのは、作品に瀕出する「火事」や「消防車」や「蒸気ローラー」などの出す炎や鐘の音や白煙である。これは Nathanael West の *The Day of the Locust* (1939) の主人公 Tod Hackett の描く「ロサンゼルス炎上」の絵と同じく終末的意味を持っている。作品冒頭から、消防車の鐘の激しい響きは読者の意識に強く焼き付く。(27) また、泥酔した Stan Emery は「ちくしょう、摩天楼になりたい」と叫び、「千ドル火事、

‘Do you remember years ago old man Specker used to talk about vitreous and superenameled tile? . . . Imagine this city when all the buildings instead of being dirty gray were ornamented with vivid colors. *Imagine bands of scarlet round the entablatures of skyscrapers. Colored tile would revolutionize the whole life of the city. . . . If there was a little color in the town all this hardshell inhibited life’d break down. . . . There’d be more love and less divorce. . .*’ (234) [Italics mine]

Phil Sandbourne は、派手なタイルで飾られた摩天楼は「堅苦しい禁欲的な生活を崩し」、「人々は愛情豊かになり、離婚は少なくなる」と考えており、都市建築の人間の精神へのよい影響を信じ込んでいる。Specker と Phil Sandbourne は、都市建築の織り成す美しいスカイラインが、物理的・人間的「自然」と融和できると考えている。これは夭折の詩人 Hart Crane (1899–1929) が、その長詩 *The Bridge* (1930) で示そうとした都市観に近い。比較のために、この詩の “Virginia”¹⁹⁾ を見てみよう。

O Mary, leaning from *the high wheat tower*,
Let down your golden hair!

High in the noon of May
On cornices of *daffodils*
The slender *violets* stray.
Crap-shooting gangs in Bleeker reign,
Peonies with pony manes—
Forget-me-nots at windowpanes:

Out of the way-up nickel-dime tower shine,
Cathedral Mary,
shine! — [Italics mine]

ニューヨークに架かる Brooklyn Bridge のもつ美しい曲線を、結合、統合のシンボル、宇宙の調和ある秩序を約束するものとみた Hart Crane は、ここでは Manhattan の摩天楼のオフィスで働く女性に「聖母マリア」の像を重ねて、都市建築と自然の風物をイメージで結びつけて、都市と自然の融和をはかっている。しかし、Dos Passos の自然と都市の関係の捉え方は Hart Crane とは

人物の都市との関わりは、二通りある。複雑化し巨大化していく都市に希望をかける者と、その都市に絶望感を示す者である。それぞれについて、特長ある人物を取り上げて、その都市観を明らかにしていきたい。

鉄道会社との示談に成功した弁護士 Baldwin は、友人 Phil Sandbourne と豪勢な食事をするが、その席でスペッカー爺さん (poa ole Specker) の理想的都市建設計画の話をする。

“...Man you ought to see his [Specker's] plans for allsteel buildins. He's got an idea *the skyscraper of the future'll be built of steel and glass. ...He's got a great sayin about some Roman emperor who found Rome of brick and left it of marble. Well he says he's found New York of brick an that he's goin to leave it of steel...steel and glass. I'll have to show you his project for a rebuilt city. It's some pipedream.*’ (76) [Italics mine]

「鋼鉄」と「ガラス」から出来た「摩天楼」は、彼にとって、「夢想」(pipe-dream) の都市建築物である。彼は、美と強靱さを備えた摩天楼は、きわめて現代的な都市のスカイラインをニューヨークに作り出すというまさに信仰に似たものを持っているのである。さらに後で、Phil は Specker について次のようにも述べている。

“Man, he was an architect. I got a set of plans and specifications home for what he called *a communal building . . . Seventyfive stories high stepped back in terraces with a sort of hanging garden on every floor, hotels, theaters, Turkish baths, swimming pools, department stores, heating plant, refrigerating and market space all in the same buildin.*’ (159) [Italics mine]

各階に「一種の庭を備えたテラス」のある75階建ての高層建築は、自然と文明の奇妙な結合というよりほかない。Specker は、都市において失われた自然を回復し、さらにこれを理想の建築にしようとしており、都市に美を再現できると信じる彼にはこの組合せの持つ奇妙さなど分かりようもない。Phil Sandbourne もまた五番街の地下に「動く循環歩道」(endless moving platforms) (233) を作る夢を持つ人物であり、彼は、Specker 爺さんの「色つきのタイル」(colored tile) で「摩天楼」を美しく飾る夢について、次のように言う。

the mist on rusty donkeyengines, skeleton trucks, wishbones of Fords, shapeless masses of corroding metal. Jimmy walks fast to get out of smell. ...Carefully he spends his last quarter on breakfast. That leaves him three cents for good luck, or bad for that matter. A huge furniture truck, shiny and yellow, has drawn up outside.

‘Say will you give me a lift?’ he asks the redhaired man at the wheel.

‘How fur ye goin?’

‘I dunno ...*Pretty far.*’ (360) [Italics mine]

この光景は、まさに「都市のゴミ捨て場 (dumping ground)」であり、「荒地」とでもいうほかなく、都市の影響は簡単には消えることはないのである。Fitzgerald の *The Great Gatsby* に現われる奇怪な「ゴミ捨て場」である ‘the Valley of Ashes’ (「灰の谷間」) のように都市の汚れは周辺部にまで広がっている。Jimmy が都市を去る決心をしたことは救いであったが、文明の汚れを逃れるには、アメリカの伝統的なヒーローたちがそうであるように出来るだけ遠くまで逃げねばならない。Jay McInerney は指摘する、「オープン・ロードに行く孤独な旅人は、アメリカの意識と文学の偉大なアーキタイプである— ‘Leatherstocking’ tales から *Huckleberry Finn* や Jack Kerouac の作品まで。」¹⁶⁾ Cooper の Natty Bumppo や Twain の Huck Finn や Kerouac の Dean Moriarty は「自由」を求めて文明から脱出する、いわゆる「アメリカの成功の夢」を放棄したアンチ・ヒーローである。Dos Passos の Jimmy Herf もこの文学的伝統上にあることは間違いない。彼らヒーローたちの行く手には、明るい未来はなかなか開けそうにない。

(3) Dos Passos の終末論的歴史観

20世紀初期のニューヨークという大都市を様々な角度から描きだそうとした作者の意識には、この大都市を、現代文明の一大頂点として、長い世界の歴史のなかで捉えて、Gelfant のいうように「歴史の構築者」¹⁷⁾ たらんとする目的があったことは明らかである。Dos Passos 自身、文学の機能を「社会の底に流れる激しい歴史の変動の潮流を助ける変革者となること」¹⁸⁾ と書いている。筆者は、Dos Passos が、都市の描写を通して終末論的歴史観を読者に提示し、それによって今世紀初頭の人々に警鐘を発したと捉えている。作者の描く登場

を保持するために、具体的な目標は何も定まっていはいないが、少なくとも都市を去ることを決心する。都市を脱出して「自由」を得ようと決心することで、彼は初めて精神の解放感を得る事が出来たのである。(359)

都市ニューヨークをあとにするためにフェリーに急ぐ。この船に、色々な種類の花を山のように積んだ荷馬車が乗り込む。

Before the ferry leaves a horse and wagon comes abroad, a broken-down springwagon loaded with flowers, driven by a little brown man with high cheekbones. Jimmy Herf walks round it; behind the drooping horse with haunches like a hatrack the little warped wagon is unexpectedly merry, stacked with pots of scarlet and pink geraniums, carnations, alyssum, forced roses, blue lobelia. A rich smell of maytime earth comes from it, of wet flowerpots and greenhouses. (359) [Italics mine]

この「花を積んだ荷馬車」のイメージを、Michael Clark は、「荷馬車一杯の花は、主人公 Jimmy が再獲得する過程にある自然な調和の客観的相関物 (objective correlative) の役目を果たしている」¹²⁾ と述べる。ここでいう「自然な調和」(natural harmony) とは Clark の論旨から見れば、都市に欠けているもの、自然の風物や人の心の自然を指しているが、Jimmy がこういうものを求めていた、あるいは、こういうものを欲しいと述べた事は一度もない。ゆえに、この花は旅立つ Jimmy への作者のはなむけであると考えておいたほうがよいだろう。都市と自然をいかにマッチさせようとしても、どこかにぎこちなさが残るものである。

Jimmy の都市脱出について、Clark は「自然界との調和のある関係を確立する」¹³⁾ ための脱出と考えて、彼に明るい未来を見ている。一方、Vanderwerken は、「彼は腐敗した社会が信ずる価値観に取って代る価値観をまだ作り上げていない」¹⁴⁾ と論じ、悲観的である。次に、Gelfant は「空をかすめるように並ぶ摩天楼の恐ろしい世界から Jimmy は逃げだすのであるが、しかし、どこに向かうのか、また自己発見に至る旅はどこまでつづくのか見当もついていないのである」¹⁵⁾ と述べ、悲観的である。筆者も悲観的な読み方をしている。Jimmy がフェリーで対岸の Jersey Flats に渡ったときの様子を見てみよう。

Sunrise finds him walking along a cement road between dumping grounds full of smoking rubbishpiles. The sun shines redly through

において、彼は歴史を遡り、はじめの「言葉」の意味を問い直そうとする。都市の街路を歩く彼には、「摩天楼が取り付き」、「雨雲の走る空からはビルが頭上に落ちかかろうとする。」(327) すぐに分かることだが、ここには、David Vanderwerken が指摘するように、聖書の「バベルの塔」の神話が援用されている¹¹⁾。摩天楼は、聖書において人々が「傲り」から築いた「バベルの塔」にイメージ的に重ねられている。その摩天楼の窓から Ellen が「金色の」衣装をまとして手招きするが、入り口はどこにも見当たらない。感覚の鋭い者が都市において「正気」(sanity)を保つためには、二者択一が必要である。(327)

... one of two unalienable alternatives: *go away in a dirty soft shirt or stay in a clean Arrow collar. But what's the use of spending your whole life fleeing the City of Destruction? What about your unalienable right, Thirteen Provinces? His mind unreeling phrases, he walks on doggedly. There's nowhere in particular he wants to go. If only I still had faith in words.* (327) [Italics mine]

Jimmyに必要なのは、「都市」に組み込まれた状態で留まるか、あるいは立ち去るかである。そして、その「都市」は「破壊の都市」に他ならないのだから留まっても何になろうか。「言葉」も信じられない状態なのに。

Jimmyは、かつての友人 Congo と出会うが、かれは Marquis des Coulommiers, さらに今では Armand Duval と名前を変えて、「アメリカの成功の夢」を達成しつつある。Congo はフランスからの新移民であり、彼の変名はアメリカ社会の流動性を示すものであろう。Jimmy自身が言うように、Congo と彼とは上昇と下降という対照的な社会内変化を遂げている。(342) その後、彼は友人 Bob Hildebrand から、5月14日に麦藁帽子を被り、それを脱がなかったために鉛管で殴り殺された男の話を聞く。この男は、フィラデルフィア出身の Saint Aloysius という名で、Jimmyは、この男を「殉教者」、「真の英雄」と讃え、守護聖人とする。「もしも僕が新しい宗教を創始するとしたら、彼を聖人とする」(357) と、Jimmyはいう。Jimmyは、St. Aloysiusを独立戦争期に英国に反抗した指導者 Patrick Henry に準える。彼も、5月に麦藁帽を被って、「自由を与えよ、しからずんば死を」("Give me liberty... or give me death.") (358) と演説したのである。Jimmyは St. Aloysiusをアメリカ建国の父祖たちの「自由の精神」を引き継ぐ人物と考えており、Aloysiusを師と仰ぐことで、彼自身の「都市の拒否」と「自由」への憧れを表している。Jimmyは、「正気」を保ち、「精神分裂」を避け、彼の「アイデンティティ」

ライノタイプを激しく打つことで Jimmy は、都市文明の具現者である Ellen を苦しめている。「ライノタイプは、輝くニッケルの歯がぎっしりと並んだ大きな口であり、がぶりと飲み込み、かりかり噛み砕いた」という表現は、Jimmy が不信感を持つ「言葉」を何の抵抗もなく食べて消化してしまう機械と化した Ellen の都市社会に生きる強さを示している。David Vanderwerken は「ライノタイプはハーフがなげすてる偽りの神 (the false god) を象徴する」¹⁰⁾と説明する。つまり、混乱した言葉に満ちた都市文明を投げ捨てなければならないのである。

「ものを書く自動機械」(automatic writing machine) (309) になることを拒否して記者としての仕事をすてた彼の生活は全く混乱してしまう。

Life was upside down, he was a fly walking on the ceiling of a topsyturvy city. He'd thrown up his job, he had nothing to do today, tomorrow, next day, day after. Whatever goes up comes down, but not for weeks, months. Spring rich in gluten. (315)

人生はあべこべになり、ひっくり返った天井をハエのように歩いている。毎日をいかに暮らすかさえも定かでない。Jimmy は「ヨンカーズに俺は子供時代を埋め、マルセイユでは、顔に風を受けながら、少年時代を港に投げ捨てた。ニューヨークのどこにおれは20代を埋めようというのか。」(317) と回想しながら、虚しい彼の人生を考える。そして、友人の Martin と Alice との会話で、やっと次のように言うことが出来る。

'Oh we none of us know what we want,' burst out Martin.
'That's why we're such a peewee generation.'

'I'm beginning to learn a few of the things I dont want,' said Herf quietly. 'At least I'm beginning to have the nerve to admit to myself how much I dislike all the things I dont want.'

'But it's wonderful,' cried Alice, 'throwing away a career for an ideal.' (322) [Italics mine]

自分の欲していないものが何かが分かり、どれほど欲していない全てのものを嫌悪しているかを認める勇気が持てるようになる。

「幸福の追求」, 「生命と自由の権利」(327) などというアメリカの国の理想に想いを巡らして Jimmy は放浪する。「言葉」が信じられなくなった現代に

が欠けている。そこで、彼は叔父の下で一カ月間仕事をしてみるが、結局、アメリカ的成功観と相容れないことを自覚する。

Jimmy fed in a tape in and out the revolving doors, noon and night and morning, the revolving doors grinding out his years like sausage meat. All of a sudden his muscles stiffen. Uncle Jeff and his office can go plumb to hell. The words are so loud inside him he glances to one side and the other to see if anyone heard him say them. (115) [Italics mine]

回りの人々と同様に、彼も「帯」のように回転ドアを出入りしており、「昼も夜も朝も、回転ドアは彼の歳月を挽肉のようにひきつぶす。」と作者は描く。「回転ドア」や「帯」という表現は、現代都市の文明の利器とそれに一様に動かされる人間の姿を示す適切な言葉である。Joseph Warren Beach は、Jimmy は「マモンの神に自らを譲り渡さない」⁹⁾と適切に表現する。

彼は大学卒業後、新聞記者の仕事につくが、充実感がなく、南米のコロンビアに脱出を計ろうとしている。そして、大戦後 Ellen と結婚するが、この生活にも徐々に不満が出てくる。彼の頭の中のからっぽの室内では、「二つの顔をもった言葉がお金のようにチャリンチャリンと鳴った。成功失敗、成功失敗と。」(274) アメリカ的価値観に順応できない Jimmy のオブセッションは「成功」と「失敗」という言葉である。記者としての仕事への不満も徐々に増大する。この仕事についても、結局、個人の意見を抹殺する新聞社の力が強大であることを知るのである。そこで、Jimmy は記者の必需品である「言葉」への不信感に充たされることになる。「言葉」を打ち出す機械「ライノタイプ」が妻の Ellen に変貌する幻想を描いた箇所は、Jimmy の意識を見事に表している。

The arm of the linotype was a woman's hand in a long white glove. Through the clanking from behind amber foots Ellie's voice Dont, dont, dont, you're hurting me so ... Mr Herf, says a man in overalls, you're hurting machine and we wont be able to get out the bullgod edition thank dog. The linotype was a gulping mouth with nickelbright rows of teeth, gulped, crunched. He woke up sitting up in bed. (296) [Italics mine]

Ellen の作品での成功への動きを捉えて批評家 Linda Wagner は、Ellen を作品の主人公と考える。Dos Passos 自身のノートに書かれた作品構成のメモを参考にして彼女は、後の Jimmy の意識の大きな変化も Ellen の物語の枠のなかに入るものにすぎず、Ellenこそが「主導的な」人物であると結論する⁶⁾。確かに Ellen はこの作品のなかで最も多く登場するが、彼女は都市における生活に順応しているだけであり、都市生活に批判を加えるなどして主体的に関わっているわけではない。つまり、都市生活の善悪を見定めて20世紀初期のニューヨークを歴史的に位置づけようとする作者 Dos Passos の姿勢から見れば、やはり主人公というには不十分であろう。都市のなかでの一つの生き方を示した人物というに留まるのである。これに対して、Michael Clark や David Vanderwerken は Jimmy Herf を主人公にふさわしいヴィジョンを持った、作品の支柱となる人物であると説く⁷⁾。筆者の読みもこれと同じである。あるヴィジョンを持った人物が作品の重要なモメントに関わること、これが主人公の条件であろう。作者 Dos Passos は Jimmy に都市生活に明確な判断を下させて、それによって、この都市の歴史的な意味を読者に伝えようとしているのである。以上の二つの意見に加えて、Gelfant は、都市のバラバラのイメージは「都市を主人公として作り出そうとする作者の総覧的意図 (synoptic intention)」⁸⁾を示していると説明する。都市を描く作者の目は鋭く微細を極めているが、これを主人公とは言えないのではないか。やはり、都市はそこに生きる人間の生き方を決定する大きな枠組みにすぎないと、筆者には考えられる。この作品において、都市は確かに生きもののよう生き生きと描かれているが、その都市のもつ現代における意味を見定める人物の姿こそが重要であろう。

(2) Jimmy Herf の都市脱出

作品の第1部、第3章から登場する Jimmy Herf は、ニューヨークで生まれたが、すぐに母親にヨーロッパに連れていかれて、今再び「自由の女神」の聳える港に帰ってきている。アメリカの歴史を絶えず念頭においている作者は、この日を、象徴的に7月4日の「独立記念日」に設定している。母親は、あの「自由の女神」の手に持った明かりは「世界の人々の心を照らす自由の明かり」(71)だと Jimmy に教えている。この「自由」と「幸福」の追求は共和国建設の理想であったので、読者は、現在のアメリカの状態との比較を強いられる。アメリカでは、彼は競争社会を肯定する銀行家の叔父 Jeff Merivale の世話で成長する。16才で彼は母親を亡くし、5,500ドルの遺産でコロンビア大学に進学しようとしている。叔父に言わせれば、Jimmy には成功しようという意欲

が妻と離婚すると、Ellen は George との結婚を承諾する。George Baldwin の次の狙いはニューヨーク市長である。ここで注目しておかなければならないのは、George の愛を受け入れて、次の成功への列車に乗りこんだ Ellen を描写する Dos Passos の文章である。

Through dinner she [Ellen] felt a gradual *icy coldness stealing through her like novocaine*. She had made up her mind. It seemed as if she had sent the photograph of herself in her own place, *forever frozen into a single gesture*. ...Ellen felt herself sitting with her ankles crossed, *rigid as a porcelain figure under her clothes*, everything about her seemed *to be growing hard and enameled*, the air bluestreaked with cigarettesmoke, was turning to glass. His [George Baldwin's] *wooden face of a marionette waggled senselessly* in front of her. (335) [Italics mine]

結婚に当然伴うべきあたたかさや幸福感というものはここには一切見あたらない。冷たく堅い「陶器」のイメージで捉えられた Ellen には、愛のない結婚（これがまた都市での成功には必要なものなのだろうが）に踏み込もうとする彼女の心の冷たさが認められる。そして、George の顔にも「操り人形」のような堅さがある。この堅さには、彼がこれまで送ってきた人生がいかに人間味に欠けたものであったかが表されている。弁護士としての成功のために不毛の人生を送ってきたのである。George は次のように自己の人生を語りかける。

'Elaine,' he said shakily, 'life's going to mean something to me now ... God if you knew *how empty life had been* for so many years. I've been *like a tin mechanical toy, all hollow inside*.'

'Let's not talk about mechanical toys,' she said in a strangled voice. (336) [Italics mine]

George が、自分は「ブリキの機械仕掛けの玩具のようだった。なかが空洞の。」というとき、「Ellen は屈辱を感じる。というのは、愛のない結婚によって彼と結ばれようとしている自分自身の感情をそれが表現しているからである。」⁵⁾と Blanche Gelfant は指摘する。しかし、ここまで Ellen を見てきた読者には、この「屈辱」感もすぐに成功を求めて邁進する姿に取って代ることが予想できる。

(1) Ellen の都市に順応した生き方

堅実な会計士の Ed Thatcher の娘 Ellen は、幼児期から、将来の舞台女優を夢見てバレエの練習に励む。成人して新進女優となった Ellen は、同じ俳優の John Oglethorpe と結婚し、アトランティック・シティに新婚旅行に行くために「マンハッタン乗り換え駅」で乗り換えをする。John がホモであるために彼女は気分がすぐれない。がしかし、彼女は John がホモである事を知りながらも、演劇界の大物であり、この上なく利用価値がある男であることを考えて結婚しているのである。Ellen がこれから次々に男を乗り換えていくことを考えると、“Transfer” という言葉は極めて象徴的であるといわねばならない。Jimmy の女友達 Ruth Prynne の Ellen にたいする人物評価は辛辣極まるものだが、的をえている。Ruth は、Ellen は「なにか得になると考えればトロリーカーとでも結婚する」³⁾ 女だと述べる。しかし、Ellen は付き合う男全てに思遣りと優しさを示すことも出来る女性である。しかし、その一方で、計算高く男を値踏みして、上手に「乗り換え」をする。John との離婚まえに、Stan Emery という金持ちで魅力あふれる男と恋仲になり、子供を孕む。Stan の死後、一時は子供を生むと主張するが、自分の不利になると考えるとすぐに墮胎する。都市における成功には、変わり身の早さが必要であり、そのためには何時までも相手に同情してはいられない。人間性の喪失と引き替えに物質的成功を得ようというのだ。彼女の声には *The Great Gatsby* の Daisy の声に「お金」の響きがあったのと同じように、「小さくて柔軟性のある金属性の鋸のような」(208) 堅く冷たい鋭さが秘められている。Daisy がこの声によって人を魅惑し上手に都市上流社会を生きぬいたように、Ellen も冷静に鋭く彼女の社会を切り開いていく。二人には、複雑な都市社会を生き抜くことができる共通の特質があるといえよう。Michael Clark によれば、「Ellen の名声は彼女の自然な自我を犠牲にして獲得されている」⁴⁾ のである。

Jimmy と Ellen は第一次大戦に従軍中に結婚する。大戦後、Ellen は Jimmy との間にできた子供を連れてアメリカに帰る。しばらくは幸福な日々が続くが、Jimmy は競争主義社会に相容れず、次第にこの社会から脱落しはじめる。一方の Ellen は Helena Herf というペンネームで雑誌の編集を行ない名声もあがる。この上昇と没落という対照的な二人の運命は、当然夫婦の不和をうみだす。彼女は成功へと運んでくれる次の「列車」に乗り換えねばならない。弁護士 George Baldwin は、鉄道列車事故に遭った Gus McNiel の事故賠償の件で名を挙げ、今はニューヨーク地方検事の椅子を狙っている。妻との離婚が首尾よくいけば Ellen と結婚するつもりである。Jimmy が失職し、George Baldwin

都市を舞台としたこの作品は、3部（セクション）から成り、世紀の変わり目から第一次大戦をへて20年代初期に至る時期を扱っている。作品の展開の仕方は、印象派風のスケッチの連続であり、それぞれのスケッチは物語として繋がってはいないので、読者が意識的にこれを再構成して一貫した物語にしていかなければならない。この点で、Faulknerの「内的独白」の手法ほどではないが、読者の参加を強制する。では、人物や事物の描写の仕方はどうかという、細部を細かく描くというのではなく、Blanche Gelfantがいうように抽出して抽象性を示す暗示的方法を取り²⁾、これは自然主義作家たち(Dreiserなど)と対照的である。抽象的にある場所の雰囲気や生活様式を描くことで、逆に現実感を出そうとしている。そしてこの印象主義的抽出という手法は、言葉による伝達や緊密な人間関係の確立が困難になった現代社会の断片化を描き、また都市化のために自然性を奪われた人間の硬質のジェスチャーを瞬間的に捉える効果的手法といえる。そこで、Dos Passosの印象主義的リアリズムと自然主義との区別をここでしておこう。登場人物の受動的姿勢、環境のなかでの個人の無力、都市の汚れた現実の描写などは確かに自然主義的特長であるが、ここには都市の破壊的力に抗う「自由意志」を持った主人公Jimmy Herfがいる。また、先に述べた「抽出された抽象性」にしても、これは作者の主観的選択によるものであり、自然主義者の特徴である「事物の客観的描写」とは違うものである。

この作品は、ビルの林立する巨大都市となっていくニューヨークにおいて、成功という「アメリカの夢」を夢みる人々の様々な生き方を描いたものである。作者は都市、現代的特質を備えた都市をあらゆる角度から鋭く光をあてて照らしたそうとする。「回転ドア」や「蒸気ローラー」や「摩天楼」(skyscraper)やコマーシャルリズムなどを現代都市の特質として描き、都市を、尽きることのない魅力を持ったものとして、また、恐ろしいまでの破壊的要素を備えたものとして読者に提示する。そして、このような都市を背景にうごめく人間の姿は、物質的な成功を修める者と都市の経済機構の犠牲者になったり、精神分裂症的になる者の二者に分けられる。前者の代表がEllenであり、後者のそれがJimmy Herfである。この小論においては、(1)Ellenの都市に順応した生き方、(2)Jimmy Herfの都市脱出、(3)Dos Passosの終末論的歴史観、という順に考察していきたい。作品の主人公が誰であるかについては、研究者によって都市、Jimmy、Ellenの三者が挙げられているが、これについては、論文の展開のなかで触れていくつもりである。

John Dos Passos:

Manhattan Transfer 論

——都市からの敗走——

馬 場 弘 利

(序)

John Dos Passos (1896-1970) の *Manhattan Transfer* の出版された1925年という年は、Fitzgerald の *The Great Gatsby* や Dreiser の *An American Tragedy* の発表された重要な年でもある。Fitzgerald は斬新な形式を特長とする新しい世代の作家たちの代表であり、後には、Hemingway, Faulkner などが彼に続くことになった。Dreiser は自然主義作家の代表であり、*An American Tragedy* は自然主義小説の最後の傑作として意味があった。Dos Passos のこの作品は、小説形式としては斬新な文体を使い、James Joyce の解体された文体に近い。一方、作品のテーマは、20世紀初頭に急速に肥大化した都市における人間の生き方である。金関氏は「この小説は、その内容ないしメッセージにおいては、むしろ旧型作品のそれに属する」¹⁾ というが、当時の作家たちの都市を扱った小説と比べてみると、明らかに都市の重層的な捉え方という点が進んでおり、やはり、20年代でなければ生まれてこない新しい小説ということが出来る。さらに言えば、急激な都市化が個人を分裂症的にするという作家の捉え方はきわめて現代的であるといわねばならない。

作品のタイトルに使われた *Manhattan Transfer* (「マンハッタン乗り換え駅」) は20年代の数年間ニュー・ジャージー州ニューアークとジャージー・シティに設けられていた駅で、ペンシルヴェニア鉄道の中間駅であり、ニューヨークに入る乗客の乗り換え駅であった。この陸路による進入路と作品冒頭に登場するフェリーの船着場は、大都市ニューヨークの中心を目指し、成功の機会を窺う人々にとって象徴的な場であった。この物語は、希望を充たしてくれるかに見える都市に入ってくるアメリカ人やヨーロッパからの新移民が都市の生活のなかでたどる運命を描きだしたものであるから。